

第 7 回 じみ研ニュースレター

2015 年 11 月
一般社団法人 地域の魅力研究所
多胡 秀人 info@jimiken.org

— 「地域の伝統産業を捨てた地域銀行はいらない」 —

最近、金融庁の某幹部の話を聴講した友人から、「非常に興奮した。講演の中で感銘したポイントとして下記の 2 点だ。」と連絡がありました。

- ① 地域の存続が重要で、地銀の存続など念頭に置いていない
- ②「経営ビジョン」ではなく、「覚悟」を問っている

まったく同感です。

この話を聞いて、数年前に役所関係の仕事で、日本の伝統文化の象徴、400 年の歴史ある地場産業の実態調査をした際のことを思い出しました。

そこで金融円滑化法の真っ只中にありながら貸し渋りが横行しているのに直面したのです。そもそもこの地域の有力事業者ですら金融円滑化法のことを知らされておらず、私の説明を聞いて驚愕するような事態に愕然としました。

ある事業者からは、地元銀行の頭取が来た時に「県外の〇〇向け融資で×億円の損失を計上するのだったら、何で地元事業者向けの 500 万円の運転資金が出せないのだ。」と詰め寄った話を聞きました。

別の事業者からは「地元銀行は会社向けには貸し渋りする割には、経営者向けの個人ローンには熱心。」と信じられない話がどんどん出てきました。

そもそも地元銀行の今があるのは、地元からの預金と地元事業者への融資による利ざやのおかげです。利ざやの蓄積が資本であり、その資本は地元経済が厳しくなった場合には、地域事業者の再生、地域経済活性化、地域における雇用の安定化のために惜しみなく使われるべきです。

世界に冠たる日本の伝統産業を見捨てて、近隣の大都市圏に経営資源を大きくシフトしている地元銀行の非道ぶりに怒りを禁じえませんでした。

調査が終了した後の総括プレゼンテーションで、私は次のように話しました。

「400年の歴史があり、世界でも評価の高いクールジャパンの象徴でもある△△が崩壊の危機にさらされている。△△が潰れたら日本人として恥であるが、■ ■銀行(地元銀行)がなくなっても日本にとって何ら損失はない。近隣の大都市圏にはたくさんの銀行があるから。」